

(城西人文研究第27巻)

〔研究ノート〕

## 嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解

(九)

黄色瑞華

## 凡例

- 一 本稿は、嘉永版『俳諧一茶発句集』(所収句八二二、他に俳諧歌一八)の全注解である。
- 一 一行めに『一茶発句集』の所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に(へ)に入れて注した。
- 一 二行め以下に㊦として、初出及び他書に所収の有無を書名によって記した。
- 一 句形等に嘉永版『一茶発句集』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 一 語注は簡略を旨とし、必要最小限にとどめた。
- 一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も最小限とした。

一 注釈史上看過しがたい諸注は、▼以下に記した。ただし、その著者名及び書名は、初出においてのみフルネームを記し、以下は「勝峯『名句評釈』」のように略記した。詳しくは稿末の「参考文献」を参照されたい。

俳諧一茶発句集 下

秋の部(承前)

うどん花

甘い露ばせをさくとして降りしよな

㊤ 八番日記(文政3・7)・文政版発句集

▽ 八番日記、中七「芭蕉咲とて」。

注 「芭蕉の花」は夏、夏の部に入るべきを誤った。

解 早々と降りた今朝の露は、芭蕉の花が咲くことの前兆だったのだな、の意。

夕やけやから紅に露しぐれ

㊤ 八番日記(文政2・2)

▽ 中七「から紅に」は、「から紅の」の誤りであろう。

う。八番日記、中七「唐紅の」。八番日記(文政2・11)、中七以下「唐紅の初氷」。

解 暮れ切らぬ夕焼空を背景に、静かな露時雨がやって来た、の意。色鮮やかな夕景である。

朝顔や人の顔にはそつがある

㊤ 文政句帳(文政6・7)

解 注文のつけようもない朝顔の花。顔は顔でも、人

の顔にこれほど整ったものは稀れである、の意。

▼ 川島『新釈』に、「朝顔を見て居る人の顔を傍ら

から観察したのである。色とりどりに美しく露を含んで咲出した花に対して、人の顔にはそれど欠点、欠点といふよりも抜けたところがあるといふので、完全な自然物に対して不完全な人間の顔の目立つて来るところがこの句の見付け処である。吟味されるとも知らずに一心に朝顔を見て居る人こそ、いゝ災難である。

薺や一霜添てばつと咲

㊤ 梅塵本八番日記(文政2)

▽ 上五・中七「朝顔や一霜そつて」。風間本八番日記(文政2・9)、上五・中七「朝顔や一霜過て」。

解 遅咲きの朝顔。うっすらと一霜あって、それを被くようにして見事な花をつけたのであろう。

▼ 川島『新釈』に、「信濃あたりの実況であろう。

未だ朝顔も衰へ切らぬ先に、急に気温が下つて、朝起きて見ると板庇などに薄霜がして、ほっくと吐

く息の白いやうなことも珍しくない現象であらう。  
その、急に白けた朝景色の中に、寒さにめげず勢よく咲出した朝顔の花の美しさが、作者の心眼を通して非常に鮮かに印象される。『一霜添へて』は、無理な用法であるが、同時に根強く踏ん張る一茶の特點を示して居る。

朝顔の上からとるや<sup>〔俳〕</sup>経山寺

㊤ 八番日記(文政4・7)・文政版発句集

▽ 中七以下「上から取や金山寺」。八番日記(文政

4・7)、中七以下「外から呼や<sup>〔俳〕</sup>経山寺」。だん袋、中七以下「上から買ふや<sup>〔俳〕</sup>経山寺」。

注 「金山寺」、金山寺味噌を言う。金山寺味噌は、いり大豆と大麦の糍に、なす、しろうりなどの刻んだものを潰込んで作った「なめ味噌」。中国径山(きんざん)の径山寺の製法を伝えたことから言うといえられる。

解 振売りの商人から、朝顔の咲く垣根越しに金山寺味噌を受け取ったのである。

女郎花あつけらかんと立りけり

㊤ 七番日記(文化13・閏8、同12)・文政版発句集・希杖本句集

▽ 七番日記・文政版発句集・希杖本句集とも中七「あつけらこんと」。

解 野末に咲いた女郎花、それはいかにも世の騒々しさにあきれて、ぼかんとした様子だ、の意。

鬼灯を膝の小猫にとられけり

㊤ 八番日記(文政3・9)・文政版発句集

解 鬼灯の袋を剥こうとしていると、膝の上にいた小猫が、突然それに飛びついて、奪い取ってしまったのである。奪われた当人のほろ苦い笑みが一句の俳諧性である。

萩 寺

存の外俗な茶屋あり萩の寺

㊤ 文政句帳(文政8・7)・文政版発句集

▽ 中七「俗な茶屋有」。

解 境内に萩が咲き乱れる静かな風情、門前の強引に客を引こうとする茶店は、いかにもこの寺には不似合だ、の意。

耳に珠数掛て折なり草の花

㊤ 文政句帳(文政6・8)・文政版発句集

▽ 文政句帳、上五・中七「耳にずずかけて折也」。

文政版発句集、上五・中七「耳に数珠かけて折なり」。

解 物理的には難解。「数珠かけて」は「数珠あてて」の意であろう。供華にと、美しく咲く野の花に手をおぼす。他者の批判に耳をふさいで、の意と解したい。

何事のかぶりくぞをみなへし

㊤ 七番日記(文化8・8)・我春集・稿本発句題叢・

発句鈔追加・希杖本句集

▽ 七番日記・我春集・発句題叢、座五「女郎花」。

発句鈔追加、座五「女郎志」。

解 秋風を受けて「かぶりく」を振っている女郎花。何を承知してのそぶりなのだろう、の意。

女郎花一夜の風に衰ふる

㊤ 文政句帳(文政8・7)

▽ 座五「おとろふる」。

解 昨日まで、咲きほこっていた女郎花、一夜の風にすっかり生気を失なってしまったことだ、の意。

入相の聞処なり草の花

㊤ 発句類題集・文政版発句集

注 「入相」、入相の鐘(の音)。

解 一面に咲きわたる秋の野草、その中に腰をおろして入相の鐘の音を聴く。極楽浄土もかくやと思われ、の意。

散芒寒くなるのが目にみゆる

㊤ 寂砂子集(太節編・文政7)・稿本発句題叢・希

## 杖本句集

▽ 発句題叢、中七以下「寒く成のが目に見ゆる」。

希杖本句集、中七以下「寒く成るのが目に見ゆる」。  
七番日記（文化15・7）、中七以下「寒く成つ〔た〕  
が目に見ゆる」（「再案」と前書）。発句鈔追加、「ち  
る芒夜の寒さが目に見ゆる」。「散芒」は冬の部に入  
るべきもの。

解 冷え冷えとした高原の風に芒の穂綿が舞って、日  
毎に寒さの深まっていくのが感じられる、の意。

▼ 栗山『名句評釈』に、「秋も末に近づくと、風の  
咲くたびに芒の穂は銀髪をみだして、ほうほうと散  
りはじめる。いよいよ寒い冬の前触れがやってきた  
という句意である。芒の穂が散りみだれるのを見て  
寒気の迫ったことをまず痛感するのは、雪国に住む  
人間にとっては異常ではない。半歳を雪に埋もれて  
すごさねばならぬ彼らにとって、冬の到来は窒息に  
も近い生活の休止である。『目に見ゆる』はすこし  
際どい措辞であるが、その重い実感からすれば、こ  
のくらしい強勢も不自然には響くまい」。

穂芒やおれが小髻もともそよぎ

㊦ 我春集・稿本発句題叢・希杖本句集

▽ 我春集、「ほ芒やおれが小びんも共そよぎ」。発句  
題叢、中七「おれが小ビンも」。七番日記（文化8・  
8）、中七「おれがつぶりも」。発句鈔追加、中七以  
下「おれが白髪もとも戦ぎ」。

解 穂芒が風になびいて、私の小髻もそれにつられる  
ようにそよいでいる、の意。

きりくしやんとして咲桔梗かな

㊦ 七番日記（文化9・8）・文政版発句集

▽ 七番日記・文政版発句集、座五「桔梗哉」。稿本  
発句題叢、「きりくしやんで咲く」。

注 「きりくしやん」、きわめてかいがいしいさま。

解 濃紫の花をいただき、すくつとのびた莖、それは  
いかにも「きりくしやん」というにふさわしい。

▼ 川島『新釈』に、「露を含んですつきりと立つ桔  
梗の花の、あの思ひ切り濃い紫。ハッキリと五つに

切れた花卉。黒ずんだ緑色の堅々とした鋸葉。率直な茎。総てに江戸前の女の面影がある。『きりぎりしやん』といふ少々癩立つ語は、実に適切に使はれて居る。但、この句に於て、『咲く』と説明語を用ゐたことは少し冗漫である。調の上から云つても、きりぎりしやんとして咲くと、ふいと腰を折られるやうな感じのあるのは、この句のために惜しいと思ふ。勝峯『名句評釈』に、「この句の味ひは無論初句だけに有る。あのすつと真直に立つ茎、きりつとした鋸葉、はつきりと五つに切れた、むしろ硬直といった感じのする五弁の薄紫の花、全体としては優しい花だが、一寸親しみにくいやうな、狎れ難い様な、張を持つてゐる清楚な貞潔な中年女といふ感じがするのがこの花である。どこまでも秋の花といふ感じがする。これらの属性を『きりぎりしやん』と例の俗語で形容したのはさすがに一茶である。『きり／＼しやん』が絶対無上の妙好辞とも言はれまいし、俗語的響きが何となく、この花に対して耳ざはりに聞えぬではないが、只その特徴を割合によく表

出してゐるといふ処にこの句の存在価値が有らう」。荻原『春秋』に、「一本の草を形容するのに、きりぎりしやんといふ長い副詞を使つて、但し、この副詞一つだけできめてしまつたのは面白い表現である。」「然し、きりぎりしやんとは如何にも、桔梗といふ花の感じを好く表はし得てゐるではないか。女に譬へてみれば、小股の切れあがつた、いきな年増で、けばけばしくはないが、水の垂れさうな、すらりとした姐さんである」。暉峻『名句の鑑賞』に、「あの桔梗の、やや硬い感じの濃紫の花、すつきりとした緑の茎や葉、張のある江戸前の女の立姿を思はせる桔梗の容姿は、言はれて見ればなる程『きり／＼しやんと』いふ形容に適はしいものであります。桔梗の特徴を、思ひがけない俗語で現はした頓才は、敬服に価するものであります。それだけに抒情詩としては深みがありません。一度きりのものです」。宮本『大観』に、「桔梗はすつきりと立った茎の上に、花卉のきれめもくつきりと、あざやかな紫色の花を咲かす。それが人でいえば、てきぱきとして、

かいがいしいさまをいう『きりきりしやん』のことばにぴったりと形容される。はぎれのいいすっきりした江戸女でも思わせる風情の花だというのである。俗語を生かしたその語調のおもしろ味といい、奇警な形容といい、いかにも一茶らしい独特の句である」。

うか／＼と出水に逢ひし木槿かな

㊤ 文化句帳（文化1・9）・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 文化句帳以下いずれも座五「木槿哉」。

解 強い風雨に打たれて、地面に倒れた木槿である。油断をしていて、すっかり水びたしになってしまったのだと見た。

むだ花に気色とられし瓢かな

㊤ 文政版発句集

▽ 七番日記（文化9・7）・株番・稿本発句題叢、中七以下「けしとられて青瓢」。希杖本句集、中七以下「気色とらるゝ瓢かな」。

解 よくのびた蔓に白い瓢の花が競うように咲いている。実を結ぶことのない花ばかりだが、まだ小さな青瓢はすっかりその位置を奪われてしまった、の意。人の目は「むだ花」にばかり向いて、せっかく実を結んだ青瓢にそそがれることはない。

萩の末芒のもとや喰祭

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加  
▽ 発句題叢、中七以下「下や喰祭り」。発句鈔追加、上五「萩のすへ」。

解 秋の行楽。向うの萩の下、こちらの芒の下に集って、飲食を楽しむ人々の光景。

江戸川や月待宵の芒ぶね

㊤ 文政版発句集

解 月見の客の時間つぶし。

名月やまづはあなたも御安全

㊤ 西原文虎あて書簡（文政4・8・12付）・文政版

## 発句集

▽ 文政版発句集、中七「先はあなたも」。七番日記（文化12・7）、中七以下「あなたも先（は）御安全」。

解 文虎の平穩無事をよろこぶ、の意。

名月の御覧の通り屑家かな

## ㊤ 随斎筆記・文政版発句集

▽ 随斎筆記、座五「屑屋哉」。文政版発句集、座五「くづ家哉」。文化五年八月句日記、座五「屑屋也」。

解 点在する屑家（貧家）に隅なく照り渡る月光。

「一視同仁」を信奉する親鸞教徒一茶の眼がうかがえよう。『正信偈』の「大悲無倦常照我」の世界に思い合わせたか。また、『おくのほそ道』日光の章の「御光一天にかがやきて恩沢八荒にあふれ四民安堵の栖穩なり」を思い合わせたか。初案は文化五年八月。「屑家」は自身の住居・生活のみをさすものではない。この年七月、祖母の三十三回忌取越法会（九日）に参会のため帰郷。そのまま滞在して、八月二十四日父の遺産分割相続についての「取極一札之

事」を村役人に差し出している。江戸帰着は十二月。



川島『新釈』に、「人の世を見透すやうな、人の世を小さく見せるやうな、明皎々たる月の照り渡る様を觀じてもらへば恐らく作者も満足であらう。くづ家は茅屋の謂である」「箱庭のやうな小ちんまりとした景色が眼前に浮んで来る」。黒沢『研究』に、「月はすべてを照らしてゐる。こんな見すばらしい屑屋まで明らかにお月様は照してゐる、有難いことであると云ふ意味を一茶特有な言葉で表現したのであります。明月の御覧の通りと云つてゐるなかには彼一茶の敬虔な心持が出てゐます。屑夜の中に一茶はつつましく月光を浴びてゐる姿であります」。頼原『名作集』に、「一茶が自ら草屋を描いてこの句を讃し、『わが家のさまを見て』と題したものがあ

る。句は皎々と照り渡る名月に対して、『御覧の通りのあばら屋でございます』と言つたのである」。

前田『古典俳句を学ぶ』に、「一句は、あたりの屑家（粗末な人家）を折から中秋名月が皎々と隅なく照しているさまを、名月に語りかけるような調子で



詠んだ句のごとくであるが、そればかりではない。  
屑(葛)家は一茶の常用語で(中略)、彼が篤く信  
仰した浄土真宗の他力思想『あるがまま』(自然法  
爾)の境地に発したことばなのである。したがって  
清光明月には、濁世の無明の闇を照す真如の月(真  
理が衆生の煩惱による迷いを破ることのたとえ)を  
利かせて、廣大無辺の仏の慈悲が等しくこれら貧家  
にも及んでいるの意がこめられているのである」。

# 病 中

名月やとばかり立居むづかしき

㊤ 七番日記(文化10・8)・志多良・文政版発句集

▽ 七番日記、上五・中七「名月〔や〕とばかり立い」<sup>(4)</sup>。

注 志多良、「先ズル時ハ制レ人」で始まる文に添えた

四句中の第二句。

解 衰弱したからだは、名月を賞するために身動きす  
ることさえこたえる、の意。文化十年六月、善光寺  
の上原文路宅で、癪(ヨウ)を病み七十五日間病臥。

名月のさつさと急ぎ給ふかな

㊤ 八番日記(文政4・8)・文政句帳(文政8・9)・

文政版発句集・茶翁聯句集

▽ 八番日記・文政句帳、座五「給ふ哉」。

解 待っていた八月十五夜の月。あれよあれよとい  
う間に、雲間にその姿をかくしてしまった、の意。

名月を取つてくれると泣子かな

㊤ 句稿消息・おらが春・文政版発句集

▽ 句稿消息・文政版発句集、座五「泣子哉」。おら

が春、座五「なく子哉」。七番日記(文化10・8)、  
「あの月をとつてくれると泣子哉」。

解 『おらが春』では、幼にして美しいものに心動か  
す子として転用。

注 『句稿消息』、成美の評は「鬼貫の口気あり」。

▼ 黒沢『研究』に、「名月の明るさ——世界中を照  
らすと思はれる鏡のやうな——のを見て、あれが欲  
しい、取つて呉れとせがむ子があるといふのであり

ます」「『呉れる』というやうな俗な言葉を用ひて、決して俗に墮せず或る詩境を描いてゐるのは、いつもながら一茶の精進にあることを嬉しく考へられます」。勝峯『名句評釈』に、「心理学者に聴くまでなく、幼い者ほど距離の認識が欠如してゐる。何千里か彼方の月も子供には屋根のすぐ上にしか思はない。背中の上で足を踏ん張つて、あの月をとつてほしいとは当然の欲望である。児童心理学の好例句である。この句程人口に膾炙してゐるものも稀であらう」「之を一茶自身の子供について詠んだ様に思つてゐるが、文化十一年は一茶が五十一歳即ち初婚の前一年である」。暉峻『名句の鑑賞』に、「漸く片言をいひはじめ、玩具の欲しくなつた時分の子供に名月を拝ませると、手をさし延べてとつてくれとせがんで泣く、児童心理の好例として人口に膾炙してゐます」。勝峯『評釈』に、「見るものを欲しがる。やればすぐ飽きて、外のものを欲しがる。本能的な私欲の発芽である。何んでも欲しがるあげ句が、天上の月へ。これは一茶の奇抜な着想である。必し

もこどもがせがみ望んだのではあるまい。『泣く子と地藏(ミナ)にはかてぬ』この諺から出た『なく子』である」。川島『新解』に、「常識の世界を超えている子供にはかなわぬと思うが、それでもまさかと首を傾けさせられる。名月をにぎ／＼したる赤子哉（文化七年）、稲妻をとらへたがる子ども哉（同九年）、あの月をとつてくれると泣子哉（同十年）、このように並べて見ると、制作過程が読めてくるようである」「この年（注、文化十年）は、帰住を決した年で、前述の如く六月半ばに瘍を發して、善光寺の門人文路の桂好亭に九月はじめまで病臥していたのであったから、病床のつれづれの改案らしく、空想をほしいままにした点において会心の作であつたろう」。

考『おらが春』第十二話の本文の後に、「より／＼思ひ寄せた小兒をも、遊び連にもと爰に集ぬ。」として、個性的な小兒を題材とした十一句が収めてある。それらは身体の動きを詠むだけではなく、それぞれの動きの中に、人間本来のはつらつとして、すがすがしい本態を發見し、それを讚美しているのである。

愛娘の「遊び連に」というのであるから、影響を受けては困るような存在は除外されて当然である。

主要な諸注は前にあげたとおりである。「大人の思いよらない難題」(古典文学大系、川島の注)、一茶はそれに「思ひ寄せた」のだろうか。また、さと女にそんな奇抜な欲求を持つような子に育ってほしいと望んだのだろうか。そうではなからう。「名月を取つてくれろ」とせがむ、その難題を超えたところで、美しいものに心動かす人の子を見たのである。「蓬葉になんむ」といふ子」は、幼にして仏心を得た子、「名月を取つてくれろと泣く子」は、幼にして美しいものに心動かす子であり、一茶はわが子にそういう影響がほしいとして、「爰に集」めたのだった。

十一人の子供を題材とした句を挙げた一茶は、わが子への影響、それによるわが子の成長過程だけを考えていたのではない。ここに集められた十一人の子供は、いずれもきわめて個性的なもののばかりである。したがって、それぞれの個性は、互いに相入れ

ないものがほとんどである。例えば「蓬葉になんむ」といふ子」にとって、「縛られながら」螢を呼ぶなどということは不可能であろう。一茶はそれを承知の上で、いずれからも影響を受けてほしいと願うのである。

愛娘の「遊び連れにも」と、十一人の個性的な子供を集めた作者の意図は、実はそれによって、親が子に対する期待、その複雑さと矛盾を述べることにあった。それによって、恩愛の情の深層を語ろうとしたのだった。親が子に対する期待とは、恩愛の情とは、かくも複雑にして、矛盾にとんだものなのだと。そして、「其引」として挙げる貞徳以下の句々は、それが個人を超えて人間共通の世界であることの傍証であった。

名月やあてにもせざる壁の穴

④ 梅塵本八番日記(文政2)

▽ 風間本八番日記(文政2・7)、中七「あたりにせまる」。

注 梅塵本八番日記、中七「当にはせざる」。

壁の穴から、八月十五夜の月光がさし込んできたのである。

### 姥捨山

けふといふけふは名月の御側かな

㊤ 文化三ノ八年句日記写(文化6)・葦草・稿本発

句題叢・文政版発句集・発句鈔追加

▽ 文化三ノ八句日記写・葦草・発句題叢・文政版発

句集・発句鈔追加とも座五「御側哉」。文化五・六

年句日記(文化6)、前書なし。座五「御山哉」。

注 葦草、「久しく願ひけるに、北国日より定めなく

て、おもひはたさるゝに、ことし文化六年八月十五

日、同行二人、姥捨山に登る事を得たり」として、

この句と、「けふの月ひろふたやうに思はるゝ、春

甫」を付す。発句鈔追加、葦草と同趣の前文を付し、

「此句本集ニノセタレドモ前文アレバ又爰ニ出ス」

と注記。

解 長年の願いがかなって、姥捨山の「田毎の月」を、

しかもその「御側」で拝することになった、の意。

### 赤馬関

名月や蟹も平をなのり出

㊤ 文政九・十句帳写(文政9)・文政版発句集

▽ 文政九・十句帳写、座五「名乗出」。

注 「赤間関」、下関の古称。「赤馬関」とも。「蟹も平

を」、背甲の表面に人面を思わせる隆起のある中型

の蟹。平家一族の怨霊の化したものと伝えられる。

平家蟹。

解 名月の夜、海底にひそんでいた平家蟹は、「われ

も平氏」と磯辺に名乗り出た、の意。

### 筑摩川舟留

名月やつい指先の名所山

㊤ 文政句帳(文政6・8)・文政版発句集

注 「舟留」、文政句帳八月の条に、「廿 陰 申ノ下

「刻」ヨリ雨終夜不止」「(廿)一 雨」「二 晴 出  
水」「四晴 浅野舟留」。

解 雨がやんで、美しい月の晩ではあるが、舟留にあつて動きがとれない。在所の名所山・黒姫は指の先なのに、の意。

やかましかりし老妻ことしなく

小言いふ相手もあらばけふの月

㊤ 文政句帳(文政6・9)・一茶翁終焉記・文政版  
発句集

▽ 文政句帳(文政6・7)・一茶翁終焉記、前書なし。同句帳(文政6・8)、中七以下「相手のほしや秋の暮」(中七「相手のほしや」「相手のことし」と併記。同句帳(文政6・9)、中七以下「相手は壁ぞ秋の暮」。同句帳(文政7・9)、座五「花筵」。  
だん袋、座五「菊の酒」。

解 仲秋の名月、語りかける妻はすでになく、さびし

さが身にしみてくる。

▼ 吉田『俳句講座』に、「八年の間形影相頼り、相頼られたる妻を思ふては断腸の思ひに信濃の月をながめたであらう一茶の心中が察せられる」。勝峯『名句評釈』に、「永い間には妻の『小言』も出たであらう。しかし、それは夫婦の間の事で、言ふ者罪なく聞く者亦罪ない程度のもので、そんな小言の全然聞かれなくなつた今の方がどんなに淋しくどんなにわびしかつたか。『小言いふ』といふ前書には、有り余つた夫婦の情が出でゐる」。加藤『秀句』に、「仲秋の名月を仰いでも、語りかける妻はすでにない。口やかましい妻だったが、いなくなると、さびしさが身に沁みてくるというのである」『『小言いふ相手もあらば』というのは、老境に入つてひとりのさびしさを噛みしめている嘆きが滲み出た語であり、この句も人に親しまれてきたものの一つである」。栗山『小林一茶』に、「最初の妻を失なつた後の遣り場のない寂寥を歌つたものである。(注、座五「菊の酒」「秋の暮」「花筵」は)初案の改稿と見

られるもので、文政六・七年の作、彼がここで歌いたいの『小言いふ相手』がほしいとの感慨であって、それに取り合わされる季語はあくまでも便宜であり、第二義的なものとしか考えられない。いわば中秋の名月でも菊の酒でも秋の暮でも花筵でもよく、そこに厳密な季感の選別がなされているのではない。いや、厳しく季感を選別するために推敲を重ねたともいえなくもなかるうが、やはりそれよりも、彼の目は強く人間の情意や生活に注がれており、自然の微趣に感応する態度は二次的な位置を保っていたとすべきであろう。一茶が伝統的な約束としての季語を捨てようとしなかった事情にしても、季語に句の生命をかけるといふうな自覚に支えられたものではなかったのである。丸山『小林一茶』に、「菊女は産後の肥立ちが思わしくなく、痛風を起したり、吐気や目まいに悩まされた末、文政六年五月十二日、まだ三十七歳の若さで世を去った。十年連れ添った妻に先立たれて、一茶も暫しは茫然為すところを知らぬ思いがしたことであろう」。宮本『大観』に、

「十年連れ添うた妻に先立たれた淋しさはいかばかりであつたろう。この名月を仰ぐにつけても、ぶつぶつ小言を言える相手とてなく、たった一人である」。姥捨など、は老足むつかしく

有合の山ですますやけふの月

④ 八番日記（文政4・9）・一茶翁終焉記・文政版発句集

▽ 八番日記、前書「姥捨なんど、草臥るも全なれば」。

解 姥捨山の田毎の月を賞するには、老の身はきつく、今年の月見は身近かな山ですませる、の意。

月 蝕

人顔は月より先へ欠にけり

④ 八番日記（文政2・8）・文政版発句集

▽ おらが春、前書「月蝕皆既子六刻左方ヨリ欠、丑ノ五刻右終。」。上

五「人数ハ」。だん袋、前書「蝕良夜二句」。上五「人数ハ」。「人の世ハ月もなやませ給ひけり」を添える。

注 八番日記、「(十)五晴 稲長二入、月蝕皆既 亥ノ七刻左ノ方ヨリ欠初。子ノ六刻甚。丑五(刻)右ニ終」。「亥七刻」、ほぼ午後十時三十分から四十五分の間。「子六刻」、ほぼ零時十五分から三十分の間。「丑ノ七刻」、ほぼ午前二時から十五分の間の現行時に当たる。「七刻」「六刻」「五刻」は、宣明曆による時刻で、一昼夜を百刻に分けて、それを十二の時にそれぞれ八刻と三分の一を配する。現行時に換算すると、一刻は十四分二十四秒と五十七分三十六秒の十二分の一ほどになる。

解 十五夜の皆既月蝕。深夜のことだったから、席を立つ者も少なくなかったのだらう。おらが春には、この句(上五、人数は)に続けて「人の世ハ月もなやませ給ひけり」「潜上<sup>(潜)</sup>二月の欠るを目利かな」「酒尽てしんの座二つく月見哉」が収めてある。「人の世は」「酒尽て」は翌九月の作。

▼ 勝峯『評釈』に、「(人数ハ)の解として」「天の

鼠が月の兎の隙を窺つて、はじから喰つて行くから、月が欠けて暗くなるのだ。お伽の国に行はれるやうな月蝕説を、それもさうかなと頷く時代の人々である。月蝕も欠けた瞬間には好奇心を唆られたであらう。夜も闇けて時は経つし、眠くはなるし、欠びを殺しながら空を見詰める忍耐もさうはつゞかない。月の欠けて行くより、その座から人の減る方が早い。一茶の緊張したこゝろには、それが憂鬱になる。不快である。それだけ一茶は昂奮してまんじりともせず、正確に月蝕の進行を記入しつゝあつたのである」。川島『新解』に、「(人数ハ)の解として」「十五夜の皆既月蝕は珍しい現象であり、当夜は晴れてもいたので、例年の月見とは異った興味で人々が集まつて来たのであつたらうが、何しろ深更の十二時前から三時過ぎにかけてであるから、意気込んでいた連衆も一人欠け二人欠けして行つたのも無理はない」。

むだ草も穂にほが咲いて三日の月

㊤ 梅塵本八番日記(文政4)・文政版発句集

▽ 梅鹿本八番日記、前書「豊秋」。七番日記(文化11・9)、前書なく、中七以下「穂に穂が咲ぞ三ヶの月」。

解 豊かな実りの秋、道の辺の雑草も穂に穂をつけている、の意。

深川や蠣殻山の秋の月

㊤ 梅塵本八番日記(文政4)・文政句帳(文政8・

9)・梅塵抄録本連句集(一茶・梅塵・痺菊三吟歌仙)・同(一茶・露谷両吟歌仙)・文政版発句集

▽ 梅塵本八番日記、中七「蛸たこがら山の」。

解 食用にした牡蠣の殻が山のように積まれている。

北信濃に定住した一茶が繁盛の江戸深川の景をなつかしく思い起したのであろう。

春耕孫祝

門の月殊に男松のいさみ声

㊤ 文政版発句集

▽ 中七「ことに男松の」。

解 久保田春耕の孫の誕生を祝った。男児の元気な泣き声をほめたのである。

翌の夜の月を請合ふ爺かな

㊤ 八番日記(文政4・9)・だん袋・文政版発句集

▽ だん袋、座五「爺哉」。

解 この分だと明日の晩もよく晴れること間違いなし、と言いつける老人の自信たっぷりなさま。

月も月そもそも大の月夜かな

㊤ 七番日記(文化9・8)・株番・稿本発句題叢・

希杖本句集・発句鈔追加

▽ 七番日記、中七「抑く大の」。株番、座五「月よ哉」。発句鈔追加、座五「月夜哉」。

解 満月も満月、天空を照し渡る大きな月よ、の意。

言語遊戯の域を出ない。六月十二日江戸を立ち、同月十八日柏原に入り、江戸帰着は八月十八日。この



間、後に有力な後援者となる北信の俳士たちに会い、晴れ晴とした気分になっていたのであろう。

明く口へ月がさすなり隅田川

㊤ 七番日記(文化9・8)・株番・文政版発句集

▽ 七番日記・株番、中七以下「月がさす也角田川」。  
希杖本句集、「あく口へ月もさすなり角田川」。

解 「明く口」、獅子頭では季が合わない。石榴の実のごときものをさすか。

赤い月是は誰かのじや子供達<sup>(5)</sup>

㊤ 七番日記(文化8・8)・株番

▽ 七番日記、座五「子ども達」。株番、座五「子共達」。

解 朝焼けの残月であろう。あの月はおれの月だとはしゃぎまわる子供たち。

秋の原知ったらなんぞ唄ふべき

㊤ 文政版発句集

▽ 座五「うたふべき」。

解 すっかり色づいた草紅葉、その美しさにふれたら、何か一句ものすべきだ、の意。

秋日和とも思はない凡夫かな

㊤ 七番日記(文化15・9)・文政版発句集

▽ 文政版発句集、座五「凡夫哉」

解 五濁悪世の貪欲・邪知に目がくらみ、こんな静かな秋の日でさえ心を開こうとしない凡夫たち、の意。

なぐさみのばつちくや秋日和

㊤ 七番日記(文化15・9)・碩斎あて書簡(文化15・

9・9付)・梅塵本八番日記(文政4)・文政版発句集

▽ 碩斎あて書簡、前書「小僧達<sup>(綿)</sup>錦勸進」。

注 「ばつちく」は、綿の実を打つ音。

解 いかにも暇つぶしのように、「小僧達」は「ばつちく」と綿の実を打っている。

母のなき子の這習ふに

をさな子や笑ふにつけて秋の暮

㊤ 文政句帳(文政6・9)・だん袋・一茶翁終焉記・

文政版発句集

▽ 文政句帳、上五「お<sup>(を)</sup>な子や」。だん袋、前

書「母におくれたる二つ子の這ひならふに」。

解 母に先立たれた二つ子、ようやく「はいく」が

できるようにはなったよろこびを満面にたたえてい  
るが、そこに付添う人の影はない。「秋の暮」に、  
その子の境遇や姿を寓した。

立な雁住ばどつこも秋の暮

㊤ 嘉永版発句集初出

▽ 八番日記(文政2・8)、上五・中七「行な雁程<sup>(住)</sup>

ばどつこも」。おらが春、上五・中七「行な雁住ば

どつちも」。句稿消息、「行な雁どつこも茨のうき世  
ぞや」。

解 旅立まいぞ、落着き先はどこも同じ秋の暮なのだ

よ、の意。秋の夕暮れにさびしいものなのだと旅立  
つ雁に語りかけた。百人一首の良暹法師の歌を暗に  
ふまえる。

▼ 勝峯『評釈』に(「行な雁」の解)、「行く雁」は

春の季語である。『行くな』と春となるを拒んで、  
秋の暮で押へたので、この句は秋、渡り来つた雁で  
ある。此の秋を棲んで暮らすには、外に目あての沼  
もあるであらうが、翅を休めに下りたこゝでゆつく  
り落着いてはどうか。百人一首の良暹法師は『淋  
しさに』の歌で『いづこも同じ秋の夕暮』と諦めた  
ではないか。どこへ行つたつて秋は淋しい、こゝで  
緩り暮しがいい。そはくする雁に相談する一茶  
のこゝろも、秋の暮のもの淋しさにやつぱり沈憂な  
のである。川島『新解』に(「行な雁」の解)、「ざ  
わめく雁の群になげかけた言葉である。秋の夕ぐれ  
はどこへ行つたつて淋しいのだ、まあここに落着い  
ていたらどうだ、というので、秋を侘びむ作者の感  
情移入である。秋の夕ぐれのさびしさを嘆くのは、  
新古今にあらわれている。三夕の歌(寂蓮・西行・

定家) 以来伝統化して、国民感情の中に深く根をおろして、文芸作品の中にさまざまあらわれ方をしている。この句、百人一首の『さびしさに宿を立ちいで眺むればいづこも秋の夕暮』を暗にふまえている。従って、この『秋の暮』は暮秋ではなく、明らかに秋の夕暮を意味している。

## 病 後

ゑいやつと活た所が秋の暮

㊤ 七番日記(文化10・7)・句稿消息・文政版発句集

▽ 七番日記、前書なし。上五「エイヤツと」。文政版発句集、座五「秋のくれ」。

注 文化十年六月、善光寺の桂好亭(上原文路)で、

癰(ヨウ)を病み、七十五日間病臥。

解 やつと命拾いをしたのだが、この年もすでに秋の暮。北信濃の冬は眼前にせまりつつある、の意。

「秋の暮」に、峠をこえた自身の生を思う気持を掛

ける。

芦の穂を蟹がはさんで秋の暮

㊤ 的申集(文化13)

▽ 画餅集(文化11)、「芦の葉を蟹がはさみて秋の暮」。発句鈔追加、座五「秋の夕」。

解 川蟹のハサミに、芦の穂綿を思い合わせたか。

中くく人に生れてあきの暮

㊤ 我春集・世美塚・文政版発句集

▽ 我春集・世美塚、上五「なかく」に。座五「秋の暮」。文政版発句集、座五「秋の暮」。稿本発句題叢・希杖本句集、上五「うかく」と。

解 たまたま人として生を受けたばかりに、さびしい秋の暮に出会うことになった、の意。

▼ 前田「新解釈」に、「季題の『秋の暮』には秋の夕に暮秋の意がこめられており、ここは、それを知命の年五十歳を目前にした衰老の境涯に重ねている。『なかく』は、中途はんばに・ぼんやりと・う

かつにの意。もの思わする万物凋落の秋の夕、うかうかと過した五十年が省みられるのである」「父の遺言に背いて郷里に帰住もせず、かといって人並の江戸生活を送っているのでもない。中途半端な遊民俳諧師のどん底生活ではないか、うかつな人生よ、などなど作者の胸中に去来する憂愁はまさに秋の暮の寂寥感そのものであろう。それにしても一句の姿に、逆境を深刻ぶるところがない。これがこの句の救いとなっている」。

#### 八月廿九日善光寺詣

本堂の柱に長崎の旧友たれかれ、八月廿八日詣るとしるしてありけるに、今は三十年余りの昔ならん、おのれ彼地にとゞまりて、一つ鍋のものを喰ひて笑ひのゝしり、むつまじき人達なり。あはれきのふ参りたらんには面会して、こしかた語りて心なぐさまんものを、互ひに四百余里の道程へだゝりぬれば、ふたゝび此世には逢がたき齡にしあれば、しきりにしたはしくなつかしくなむ。

近づきの楽書見えて秋の暮

#### ㊤ 文政版発句集

▽ 文政版発句集、中七「楽書見へて」<sup>(文)</sup>。文政句帳(文政5・9)、前書「善光寺の柱に長崎の旧友昨日通るとありけるに」。上五・中七「知た名のらく書見へて」<sup>(え)</sup>。だん袋、前書「善光寺二詣けるに、長崎の旧友きのふ通るとありければ」。上五・中七「知た名の楽書見へて」<sup>(え)</sup>。

解 関西・四国・九州への旅(寛政4・3〜同10・8)で、風交を結んだ「旧友」の楽書を見つけ、往時をなつかしむ。

茶店万灯日ましにへりぬ

両国の両方ともに夜寒かな

㊤ 七番日記(文化10・7)・志多良・文政版発句集  
▽ 七番日記、前書なし。座五「夜寒哉」。志多良・文政版発句集、座五「夜寒哉」。句稿消息、前書

「茶店の万灯きのふと成りぬ」。中七以下「両方一度に夜寒哉」。希杖本句集、前書なし。中七以下「両方一度に」。

解 「両国」に「両方」を言い掛けた言語遊戯。

うそ寒や親といふ字を知てから

㊤ 七番日記（文化10・9）・句稿消息（補遺）

▽ 七番日記・句稿消息、前書「周流諸国五十年」。

注 句稿消息（補遺）は、県立長野図書館蔵の断簡。

全集本に「補遺」として付す。

解 何とはなしに肌寒さを感じさせる秋の暮、この肌寒さ心細さは親里を離れてこのかたずっとこの身につきまとう、の意、「親といふ字を知てから」は、ものごころついてこの方、の意を含む。

六十にふたつふみ込む夜寒哉

㊤ 七番日記（文化11・7）・文政版発句集

▽ 七番日記、中七「二ッふみ込む」。

注 文化十一年は一茶五十二歳。

解 還暦を越え、晩秋の寒さはいよいよ身にしみる、の意。

うそ寒をはや合点のとんぼかな

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 発句題叢・希杖本句集、座五「蜻蛉哉」。発句鈔

追加、座五「とんぼ哉」。文化五年八月句日記、上五「朝寒も」。座五「とんぼ哉」。

解 朝夕気温が少しさがって、秋の気配が感じられる。出番が来たと早合点した赤とんぼが飛んでいる、の意。

あばら骨なでじとすれど夜寒哉

㊤ 七番日記（文化10・8）・志多良・句稿消息・文

政版発句集

解 夜寒の候。からだを丸めれば瘦せた胸もとあたり自然に手先がいく、の意。

寝筵や虱わすれて漸寒き

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 発句題叢、中七以下「虱忘れてや、寒き」。七番日記（文化11・9）、「寝むしろや虱忘れてうそ寒〔き〕」。発句鈔追加、上五・中七「寝むしろや虱がわすれて」。希杖本句集、中七以下「虱忘れてや、寒し」。

解 気温がさがり、寝筵に虱の影もなくなったが、一枚の筵では昼寝の用にはたりない、の意。

朝寒や垣の茶箒の影法師

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

解 落葉樹で結んだ垣であらう。散り残った葉影に陽がさして、茶箒のような形で地面に映っている。

うそ寒や蚯蚓の唄も一夜づゝ

㊤ 八番日記（文政2・7）

▽ 八番日記、「うそ野や蚯蚓(寒)の歌も一夜ツゝ」。梅塵本

八番日記（文政2）、「うそ寒や蚯蚓の唄も一夜ツゝ」。

八番日記（文政2・5）、中七以下「蚯蚓の声も一

夜ツゝ」。

解 うすら寒い夜である。夜毎に聞こえる地虫の声もきのうよりは今日、次第に低く細くなっていく、の意。

▼ 川島『新釈』に、「みゝずはうたはないものであるが、いつか地虫のジーツゝ、と鳴くのを、蚯蚓が鳴くと誤り伝へられて了つた。然し誤りは誤りとして、この句の気分だけはよく分る。秋も末になつて、そよ吹く風も肌寒を覚える頃ほひ、夜な／＼庭先に聞く地虫の声も昨日よりは今日と次第々々に細つて行く、哀れにも心細い晩秋の情趣である。「も一夜づゝ」に、人の心を瞑想に導くやうな余韻がある」。黒沢『研究』に、「哀れ心細い晩秋の情趣であります。大地のなかに、こもつてゐる地虫の声には実に人の心を瞑想に導く力が含まれてゐる。——うすら寒い夜、高原に立つて、この瞑想に幾度か導かれ導かれて、ついに重い／＼冬の気配に浸りきつて了ふのでした。一茶はその気配を身内に感じつゝ、一夜／＼に細りゆく蚯蚓の声に耳を傾けぬいてゐるのであります。その境地がこの句をして余韻あらしめてゐます」。